

死に関する現代学生の意識構造の研究

田 路 慧 片 山 信 子
岡 野 初 枝 *掛 橋 千 賀 子
井 村 圭 壮 中 野 邦 子

SUMMARY

This paper is the report on the consciousness investigation concerning the matters of the Death, namely the awareness of death, the wish to death, the suicide, the brain death, the euthanasia, the announcement of death, the hospis, the soul, the state after death, the religion, the funeral, the grave, the conversation about death, and the education about death, from the modern students majoring in the medicine, nursing, social welfare, care work and so on.

Key words : the awareness of death, brain death, euthanasia, funeral, death education

はじめに

現代人の果てしない生存と所有と享樂の追求と充足のための科学技術なかんづく医療技術の急激な発達、これまで人間が侵してはならない神秘の聖域とみなされてきた生命の誕生と死の領域にまで食指を伸ばし、神秘の覆いを剥ぎ取り操作しようとするまでに至った。われわれ人間はこれらの技術の進歩によって多くの希望を与えられるとともに、人間としてのあり方のうえで新たに倫理的な多くの疑問や不安を抱かざるをえないことになった。特に医療従事者による生と死の管理、生殖技術の開発、延命技術や機器の発達、臓器移植、脳死あるいは安楽死などは、自然における生命の摂理を攪し、人間らしい生き方・死に方に根源的な問題を喚起し様々の生命倫理上の諸問題を提起することとなった。

一方近年生命軽視の風潮が著しく蔓延し、子どもたちの心を蝕み、自殺や殺人の低年齢化が進み、際限のないじめや不登校・退学は止めどもなく増加し、さらに覚醒剤や大麻など薬物中毒が低年令層にまで深く浸透し、刹那的な享樂を追い求める傾向が次第に強くなってきている。また生徒・学生たちの思考力の低下は甚だしく、考えることを嫌い、無思考・無気力・無感動・無

* 岡山県立大学保健福祉学部看護学科

節操で虚無的な気分が充満し、感覚的に物事に対処し衝動的に行動するか、あるいは自らの判断を避け他者の指示を待ち無批判に現状に追従する傾向が著しく進行している状況である。これらの原因の一つは死を無視し抑圧してきた現代文明のあり方にあるとみなされ、死についての教育の重要性が強調されるようになった。特にやがて人間の死と対峙せざるをえない保健・医療・福祉事業に従事する学生たちにとっては死に関する教育はいっそう重要であるということができよう。

われわれはこれまで医療・看護・保健・福祉事業従事者養成教育における生命倫理教育の構築を目指して、その基礎資料を得るため生命倫理に関する諸問題について学生たちの意識調査を行ってきた。今回は上述のような観点から特に「死」に関する諸問題について意識調査を行った。ここにその基本的な集計と分析が終わったのでその成果を報告する。なお統計的処理に基づく解析や比較検討は改めて発表する予定である。

調査対象及び方法

1. 調査対象

医歯・看護・理学療法・作業療法・社会福祉・介護福祉・文学系学生
男子学生276名 女子学生1496名 合計 1772名

2. 調査方法及び調査期間

質問紙法による集合調査 1995年10月～1996年 2月

3. 分析方法 各回答の有効数に基づき基本集計と分析を行った。

結果の分析と考察

1. 「死に関する意識と死別の体験」について

- 1) 「あなたはこれまで死について意識したり、考えたりしたことはありますか」という質問に関しては、「ある」という答が1702名 (96.1%) 「ない」が69名 (3.9%) であった。これを見るとほとんどの学生が死について意識したり考えたりした経験をもっていることがわかる。
- 2) 「最初に死について考えたのは何歳の頃ですか」という質問については、「小学生以前」が128名(7.5%)、「小学生の頃」776名(45.4%)、「中学生の頃」442名(25.8%)、「高校生の頃」226名(13.2%)、「専門学校・大学生になって」が115名(6.7%)、「その他」24名(1.4%)であった。「小学生の頃」が半数近く、「小学生以前」が7.6%あり、ほとんどの学生が専門学校ないし大学に入学するまでに死について意識したり考えていた。
- 3) 「どんな時死について考えましたか」という質問については、回答の多い順に挙げると、「肉親や親戚の死に出会った時」が567名(34.6%)、「ふと何となく」357名(21.8%)、「自分の人生について考えた時」236名(14.4%)、「友人・知人の死に出会った時」181名(11.0%)、「死亡報道を見て」89名(5.4%)、「自分が事故にあったり病気になった時」

が62名(3.8%)、「学校の授業を聞いて」は36名(2.2%)、「実習に行って」が12名(0.7%)、「その他」100名(6.1%)であった。肉親や友人など親しい身近な人の死が「死を意識し考える」大きな契機となっていることがわかった。

平成5年度に行った「生命倫理・介護・老人観等に関する意識調査」(註)の中の同じ主旨の質問の答と対比してみると、前回の結果は「ふと何となく」が34.8%、「人生について考えた時」が15.8%、「肉親や親戚の死に出会って」が9.8%、「死亡報道を見て」が9.7%、「友人・知人の死」が8.7%などの順であり、前回は死について考えるのに実存的な契機が多かったのに比べ、今回は肉親の死や友人などの死が多かった。

4)「あなたはこれまでに会った身近な死の中で特に影響を受けたのはどの場合ですか」という質問に対しては、「祖父母の死」が705名(41.3%)、「友人知人の死」347名(20.4%)、「ペットの死」221名(13.0%)、「親戚の人の死」181名(10.6%)、「父母の死」62名(3.6%)、「兄弟姉妹の死」22名(1.3%)で、身近な死の中で特に影響を受けたことのない学生は167名(9.8%)であった。「祖父母の死」「友人知人の死」さらには「ペットの死」など親しい身近な死が大きな影響を与えることが伺われる。

5)「あなたは臨終に立ち合ったことはありますか」という質問については、「ある」が385名(21.8%)、「ない」が1384名(78.2%)であった。「祖父母・父母・兄弟姉妹の死」を経験した者が46.2%もいるのに、臨終に立ち合った経験のある者がその半分にも満たないのは、現代では病院で死亡することが多いためであろう。

2. 「死への誘惑とその契機」について

6)「あなたはこれまで死にたいと思ったことはありますか、それを最も感じたのは何歳の頃ですか」という質問については、「小学生以前」が12名(0.7%)、「小学生の頃」251名(14.3%)、「中学生の頃」411名(23.4%)、「高校生の頃」182名(10.4%)、「専門学校・大学生になって」93名(5.3%)で、「ない」が804名(45.9%)であった。ここでも「小学生以前」と「小学生の頃」が15.0%もあり、近年の自殺の低年齢化を裏付けているとみなすこともできよう。専門学校・大学生になるまでに「死にたいと思ったことがある」と答えた学生が856名(48.8%)と約半数もいた。

7)「これまで死にたいと思ったことがある」と答えた学生に対する「死にたいと思ったのはどんな時ですか。主なものを一つ選んで下さい」という質問に対しては、「空しさを感じた時」が174名(18.9%)、「孤独を感じた時」173名(18.8%)、「いじめられた時」156名(16.9%)、さらに「ふと何となく」が117名(12.7%)、「吐られた時」99名(10.7%)、「目標がなくなった時」37名(4.0%)、「成績が良くない時」33名(3.6%)、「失恋した時」31名(3.4%)、「受験に失敗した時」が14名(1.5%)の順で多く、「その他」が87名(9.4%)であった。

「死にたい」と思った契機が「受験の失敗」や「失恋」などの挫折よりも、「孤独」や「空しさ」「目標喪失」の方が多く41.7%あり、また「ふと何となく」が12.7%もあることは、人間が意味と交わりを求める実存的な存在であり、また人間が「死への存在」であることを学生たちの反応は無意識のうちに表しているということができよう。さらに「いじめられた時」が16.9%もあることは、最近のいじめによる自殺の頻発を見る時、いじめがいかにか子どもたちの心を傷つけ死へ追い込むかが伺われる。

3. 「自殺」について

8) 「あなたは自殺についてどう思いますか」という質問については、「絶対にしてはならない」が660名(37.8%)、「自殺は人生からの逃避である」613名(35.1%)、「時と場合による」284名(16.3%)、「死にたい人は死んだらよい」96名(5.5%)、「自殺は自由の表現である」33名(1.9%)、「何となく引かれる」16名(0.9%)、「自殺は救いである」12名(0.7%)「その他」が31名(1.8%)であった。自殺を絶対的に否定する学生が37.8%、また自殺を人生からの逃避とみなす学生が35.1%あり、自殺に対して否定的な考えをもっている学生が七割余あることは健全な傾向と見ることができよう。しかし自殺は自由の表現であるとか、救いであるとか、何となく引かれるとか、時と場合によるなど、自殺に対して否定的ではない反応を示す学生が全体の四分の一余りもいることは注目しなければならないであろう。

4. 「死に対する感情」について

9) 「あなたは死についてどのような感じをもっていますか。主なものを一つ選んで下さい」という質問については、「恐怖」が474名(27.4%)と最も多く、「無・空」が334名(19.3%)、「不安」189名(10.9%)、「別離」188名(10.9%)、「喪失」159名(9.2%)、「淋しい」153名(8.8%)、「往生・再生」84名(4.9%)、「苦悩からの救い」57名(3.3%)、「安らぎ」44名(2.5%)、「魅力的」が11名(0.6%)と続き、「その他」が37名(2.1%)であった。

「恐怖」と「不安」が四割弱、「無・空」「喪失」が三割弱、「別離」「淋しい」が二割弱とあることはまずは一般的な感じ方とみなすことができよう。それに対し「安らぎ」「苦悩からの救い」「魅力的」という肯定的な感じ方が6.4%もあることは、前項の自殺を否定的には捕えない回答と対応して、特に注目に値するといえよう。

5. 「脳死」と「植物状態」について

10) 「最近心臓や呼吸の停止をもって死とする考え方に対して、脳の機能の停止をもって死とする考え方すなわち『脳死』が提示されています。あなたは脳死をもって死と判定する考え

方に賛成ですか」という質問については、「賛成」が548名(31.0%)、「反対」が248名(14.0%)、「どちらともいえない」が974名(55.0%)であった。

平成5年度の意識調査では「賛成」が37.4%、「反対」が13.5%、「どちらともいえない」が49.1%であったが、今回の調査では「賛成」が6ポイント減少し、「どちらともいえない」が6ポイント増えている。爾来2年を経、脳死問題がマスコミに頻繁に取り上げられているにもかかわらず態度の保留が増加していた。

- 11) 「脳卒中などの病気や事故などで脳の機能が正常に働かなくなり、意識もなくなってただ生理的に生きているだけの状態『植物状態』になった時、あなたは生きていたいですか」という質問については、「生きていたい」が84名(4.7%)、「生きていたくない」が1396名(78.7%)、「どちらともいえない」が293名(16.5%)であった。

平成5年度の調査では同じ質問に対して「生きていたい」が7.2%、「生きていたくない」が79.8%、「どちらともいえない」が12.9%であった。今回の調査でも同様の傾向が見られた。

6. 「不治の病にかかった時の諸問題」について

イ. 「告知」について

- 12) 「治療してもまったく治る見込みのない不治の病にかかった時、あなたはそのことを告知してほしいですか」という質問については、「告知してほしい」が1436名(81.0%)、「告知してほしいくない」が142名(8.0%)、「どちらともいえない」が195名(11.0%)であった。

ロ. 「臓器移植」について

- 13) 「あなたは自分が不治の心臓病にかかった時、心臓移植を受けたいですか」という質問については、「受けたい」が829名(46.8%)、「受けたくない」が388名(21.9%)、「どちらともいえない」が555名(31.3%)であった。

平成5年度の調査では、「受けたい」が46.8%、「受けたくない」が19.0%、「どちらともいえない」が34.0%であった。学生たちの意識はあまり変わっていないようである。

心臓移植は脳死を前提とするが、脳死賛成者が三割しかいないのに、心臓移植希望者が五割近くもいるのは、脳死や臓器移植の問題が学生たちには十分理解されていないことを示しているといえよう。

ハ. 「尊厳死」について

- 14) 「治療してもまったく治る見込みのない不治の病にかかったことが分かった時、積極的な治療をせず痛み止めなど苦痛を少なくする治療をして、安らかに死に至らしめる消極的な安楽死ないし尊厳死に、あなたは賛成ですか」という質問については、「賛成」が1167名(65.9%)、「反対」が124名(7.0%)、「どちらともいえない」が480名(27.1%)であった。

平成5年度の調査では「賛成」が76.0%、「反対」が7.6%、「どちらともいえない」が16.3%であった。比較すると「賛成」が大幅に減り、「反対」は変わらず、「どちらともいえない」が大幅に増加していた。

二. 「ホスピス」について

15) 「治る見込みのない病気にかかった人に対して、痛みの緩和などの必要最小限の治療を行い、安らかな死をむかえるようにする『ホスピス』といった場がありますが、あなたはホスピスについて知っていましたか」という質問については、「知っていた」が1294名(72.9%)、「知らなかった」が478名(27.1%)あった。医療・看護・介護関係の学生たちが調査対象であるわりには知っている者が少ないといえよう。

16) 「あなたは自分が不治の病にかかった時、ホスピスを利用したいと思いますか」という質問については、「利用したい」が988名(55.7%)、「利用したくない」が203名(11.5%)、「どちらともいえない」が581名(32.8%)であった。

ちなみに平成5年度の調査では「あなたは死をどこでむかえたいですか」という質問に対して「ホスピス」は5.1%で、「家庭」と答えた者が93.0%であった。今回の調査で「利用したくない」「どちらともいえない」と答えた学生は「家庭」での死を望んでいるのであろうか。

7. 「靈魂の存在と死後の世界」について

17) 「あなたは靈魂の存在を信じますか」という質問については、「信じる」が903名(51.0%)、「信じない」が323名(18.2%)、「どちらともいえない」が546名(30.8%)であった。科学万能合理主義全盛の時代に生まれ成長した学生たちの半数余が靈魂の存在を「信じる」と答えているが、最近背後靈や先祖靈の祟りや悪靈払いを標榜する新興宗教に若者たちが簡単に取り込まれるのもうなずける。

18) 「あなたは自分の死後についてどのように考えていますか。あなたの考えに近いものを一つ挙げて下さい」という質問については、「永遠の眠り」が366名(20.8%)、「未知・不可解なるもの」327名(18.6%)、「新たな世界への旅立ち」226名(12.8%)、「天国か地獄に行く」203名(11.5%)、「靈魂が輪廻する」179名(10.2%)、「肉体と精神の消滅」177名(10.1%)、「大地・宇宙に帰る」72名(4.1%)の順で、「わからない」が209名(11.9%)であった。「新たな世界への旅立ち」「天国か地獄に行く」「靈魂が輪廻する」など何らかの意味で死後の世界の存在を信ずる傾向のある答が34.5%あった。

8. 「宗教」について

19) 「あなたは死について考えるうえで宗教は大きな役割をもつと思いますか」という質問については、「思わない」が746名(42.1%)、「思う」が547名(30.9%)、「どちらともい

- えない」が479名(27.0%)であった。宗教の特質の一つは死の問題に取り組むことであるといわれているが、四割余の学生が死について考えるうえでの宗教の役割を否定していた。
- 20) 「あなたは特定の宗教を信じていますか」という質問については、「信じていない」が1565名(88.6%)、「信じている」が201名(11.4%)であった。宗教行事には参加するが特定の宗教は信仰しない日本人の特色が出ているといえよう。
- 21) 特定の宗教を信じている学生に対する「あなたは死について考えるうえでその宗教が役に立っていますか」という質問については、「大いに役立っている」が51名(26.0%)、「ある程度役立っている」が105名(53.6%)、「あまり役に立たない」が27名(13.8%)、「全然役に立たない」が13名(6.6%)であった。特定の宗教を信ずる学生のうち八割の学生が死を考えるうえでの何らかの宗教の役割を認めていることになる。死について考察するうえで宗教を無視できないゆえんである。

9. 「葬式」と「墓」について

- 22) 「あなたは自分の葬式についてどう思いますか」という質問については、「盛大にしてほしい」が117名(6.6%)、「必要最小限でいい」が1461名(82.5%)、「する必要はない」が193名(10.9%)であった。
- 23) 「あなたは死後自分のために墓を作ってほしいと思いますか」という質問については、「是非作ってほしい」が844名(47.9%)、「あってもなくてもよい」が770名(43.7%)、「墓などいらぬ」が148名(8.4%)であった。墓を「是非作ってほしい」と答えた学生が五割近くもあったことは、この地上に自分が存在したという証を求めているのであろうか。葬式は「する必要はない」「墓などいらぬ」と答えた学生の割合がほぼ同じであり、また「あってもなくてもよい」と答えた学生が四割強もあることは、慣習や形式にこだわらない新しい傾向の表れであろうか。最近葬式をしないよう遺言して死んだ有名人の報道がよく見られるが、その影響も考えられよう。
- 24) 「あなたは骨を砕いて海や山に散布する散骨など自然葬という考え方がありますが、あなたは知っていますか」という質問については、「知っている」が1393名(78.6%)、「知らない」が379名(21.4%)であった。八割近くの学生が知っていることは、最近葬式や墓に関する話題がよくマスコミに登場するようになったため、学生たちも関心をもつようになったのであろう。
- 25) 「あなたは自分の場合自然葬に賛成ですか」という質問については、「はい」が469名(26.5%)、「いいえ」が607名(34.3%)、「どちらともいえない」が696名(39.3%)であった。自然葬に賛成の学生が三割近くもいることは、人生の締めくくりの儀式のとらえ方に変化の兆を見ることができよう。しかし長年の社会的慣習を打ち破るのは相当の勇気がいることである。

10. 「死についての学習・対話」について

- 26) 「あなたは死について学んだり考えたりすることは生きていくうえで意義があると思いますか」という質問については、「ある」が1511名(85.2%)、「ない」が56名(3.2%)、「どちらともいえない」が205名(11.6%)であった。このように八割余の学生が死について学び考えることの意義を認めていた。
- 27) 「あなたはこれまで死について真剣に話し合ったことはありますか」という質問については、「ある」が818名(46.2%)、「ない」が952名(53.8%)であった。死について意識したり考えたことのある学生は96%いたにもかかわらず、真剣に死について話し合った経験のある学生は46%に止まっていたことは注目すべき問題であろう。
- 28) 「それは主として誰とですか」という質問については、「友達」が401名(51.7%)、「母」181名(23.4%)、「先生」52名(6.7%)、「父」41名(5.3%)、「兄弟姉妹」40名(5.2%)、「祖父母」13名(1.7%)で、「その他」が47名(6.1%)であった。「友達」が五割余で最も多く、次いで「母」が多い。死について真剣に話し合うにはかなり打ち解けた関係が必要なのであろう。死の教育や自殺の予防の点からもこのことは考慮すべきであろう。
- 29) 「それはいつ頃ですか」という質問については、「高校生の頃」が304名(38.3%)、「専門学校・大学生の頃」が290名(36.6%)、「中学生の頃」が146名(18.4%)、「小学生の頃」が53名(6.7%)であった。小学生以前、小学生の頃さらに中学生の頃に、死を意識し考え、死にたいと思った者がかなりいるにもかかわらず、その時期に死について余り話し合われていないことがわかる。

11. 「学校における死の教育の経験」について

- 30) 「あなたはこれまで学校の授業において死について学んだことがありますか」という質問については、「ある」が1105名(63.0%)、「ない」が648名(37.0%)であった。六割余の学生が死について学んだことがあると答えていた。
- 31) 「それはいつ頃ですか」という質問については、「小学生の頃」が95名(8.8%)、「中学生の頃」が117名(16.4%)、「高校生の頃」が203名(18.8%)、「専門学校・大学生になって」が605名(56.0%)であった。ここでも一番必要と思われる時期に死に関する話や授業が行われていないことが伺われる。

12. 「学校における死の教育の必要性」について

- 32) 「あなたは学校において特別に死に関する授業を行うことは必要だと思いますか」という質問については、「思う」が1045名(59.1%)、「思わない」が159名(9.0%)、「どちらともいえない」が564名(31.9%)であった。約六割の学生が学校における死の教育の必要

性を認めていた。

- 33) 学校における死の教育を必要と思う学生に対する「それはいつ頃すればよいと思いますか」という質問については、「小学生の頃」が310名(30.3%)、「中学生の頃」が475名(46.4%)、「高校生の頃」が154名(15.0%)、「専門学校・大学生の頃」が85名(8.3%)であった。

32), 33)に見られるように、六割の学生が学校における授業としての死の教育の必要性を認め、しかもその時期については小学生の頃が三割、中学生の頃が六割弱と、小・中学生時代での死の教育の必要性を主張していた。しかし現実には31)で見たように、小・中学生の頃には合わせて二割余の者しか死に関する授業を受けた経験がなかった。

- 34) 「今学んでいる学校において特別に死に関する講義を受けたいと思いますか」という質問については、「思う」が896名(50.7%)、「思わない」が289名(16.4%)、「どちらともいえない」が581名(32.9%)であった。このように死の教育の必要性を認める者が多いのに比べ、専門学校や大学で死の講義を受けたいと思う者が五割と意外に少ないのは、先述のようにある程度痛切に必要と思う小・中学生の時期を過ぎているためであろうか。

平成5年度の調査の「あなたは死についての教育は必要だと思いますか」という質問では、「必要と思う」が71.7%、「必要と思わない」が9.6%、「どちらともいえない」が17.4%であった。今回の調査では死の教育は「必要と思う」学生は減少し、「どちらともいえない」という態度保留学生が大幅に増えていた。それは今回の調査対象の学生の大半が一回生であることにもよると思われる。学年が上がるに従って死の教育の必要性を認める回答は増加していた。

13. 「生きがい」について

- 35) 「あなたは今生きがいがありますか」という質問については、「ある」が1052名(59.4%)、「ない」が173名(9.8%)、「どちらともいえない」が544名(30.8%)であった。学生たちの無気力・無目標が問題とされだして久しいが、調査対象の学生たちのほとんどが医師や看護婦、理学療法士、作業療法士、社会福祉士、介護福祉士養成という目的のはっきりとした専攻に所属しているにもかかわらず、生きがいを持つ学生が六割しかいないのは専門職教育にとって今後の大きな課題であろう。

- 36) 「何が生きがいですか」という質問については、自由に記述してもらったところ次のような答えがあった。多い順に記述すると「将来の目標や夢に向かって努力すること」「家族・友人(など親しい人と過ごすこと)」「生きること・今の生活」「毎日の学生生活」「遊び・楽しみ・趣味」「恋愛・恋人」「自分のしたいことをすること」「目指す仕事につくこと」「ボランティア活動など人の役に立つこと」「食い・寝ること」「自分の成長」「秘密」などであった。なかでも一回生の時には「勉学など学生生活」であった学生たちの生きがいが、

二回生以後になると急速に「友達」や「遊びや趣味」あるいは「恋愛や恋人」に変わることがわかった。

14. 「人類の滅亡への関心」について

37) 「あなたは人類滅亡の危機について考えたことはありますか」という質問については「ある」が1544名(88.0%), 「ない」が210名(12.0%)であった。ほとんどの学生が人類滅亡の危機を意識しているのは、核問題や環境問題などマスコミの報道の影響によるところが多いと思われる。人類滅亡の危機の自覚は、人々の生や死についての感情や思考に大きな影響をもたらすであろう。

15. 「死に関する所感」について

38) 「死についてあなたの思うこと感じることをご自由にお書き下さい」という欄を設けておいた。そこに書かれていたことを挙げておきたい。

同じ主旨のものをまとめて挙げると、「死は恐ろしい。死にたくない」と死に対する恐怖・不安・悲哀・孤独など死に対する所感を述べたものが最も多く、「最近中学生など子どもの自殺が多いのは問題、自殺は逃避で悪だ」といった内容のものも非常に多かった。「精神や靈魂の不死・死後の世界の存在を信ずる」「死は別れ」というものや、「死は安らぎ」「死に恐怖は感じない」が結構あった。また「死は必ず来るのだから毎日を悔いのないように楽しく生きよう」と決意を述べたものも多く、「死について考え話し合うことは大切なことだ。そういう機会や授業があったらよい」という意見も相当あった。注目すべきものを幾つか原文のまま挙げておきたい。

イ. 死に対する感情について

「私にとって『死』は恐怖でしかない。死んでしまったら遺体を焼かれ、その人の体は存在しなくなり声さえ聞けない。まったく無の状態になってしまう。死んだ途端何もなくなってしまうのは余りにも悲し過ぎ『生そのもの』が何であったのかと考えてしまう」

「実習に行っていたとき数分前まで元気だった人が急に状態が変わって死に至った。私は人間でこんなにもはかないものなのかと思った。何か言葉では言い表せない程心を動かさせられるものだと思う」

ロ. 自殺と死についての学習について

「テレビや雑誌などで死が軽く扱われていることが多い。だから死に対するあいまいな判断がされるような気がする。親や学校から死について教わらない子どもたちはどうやって死を受け止めるのであろうか」

「死についてきちんと学ぶ場は必要だと思う。小学生の頃にもっときちんと死について学べる場があったら良かったと思う」

「最近中学生のいじめが理由の自殺が多いですが、もっと学校で生命の尊さ、後に残されたものの悲しみなどを教育するべきだと思います。死んだらすべてから逃れられるという考えには反対です」

ハ. 将来の仕事と死の教育について

「私たちが仕事につけば老人との関わりができますが、老人と接するとき、老人は死についてやはり考えることが多いと思います。そのときの対応の仕方、どんなふうに接したらいいか、勉強してみたいです」

「『自分が死ぬのはずっと先のことから』と思いがちで死について真剣に考えることは難しい。でも明日にでも死ぬかもしれないし、自分だけでなく回りの人もその可能性はある。それに老人の施設に就職するとなれば、臨終や終末期の利用者と接することは避けられないので、死について考えることは必要だと思う」

ニ. 死の受容と死の思索について

「死は今日まで特に戦後、タブー視される面が多くなり、生きている人々は表面上幸せな振りをしている。死とは嫌なもので、初めからなかったものと考えられている。私は学生の頃からもっと死を見つめる必要があるし、その教育によって相手の気持ちを考えると社会が築かれると思う。死は誰にとっても未知なもので、不安はつきまとう。だからといって、それから目をそらすのではなく受け入れることが、今、現在の『現代人』には欠如しているのではないだろうか」

「死は恐ろしいものだと思ってはいたけれど、大学で死生学を学んでみて、そういう気持ちはなくなりました。肉体は滅んでも自分の考えや自分自身が誰かの心の中で生きていたら本当に嬉しい」

「中学生の頃祖母の死を経験し、命のはかなさを知ったと同時に残された人々の心の中で永遠に生き続けることができるのだと思った。そして大学生になり特養での実習をし、また死について話し合う機会があり、自分の死生観がかなり明確になったと思う。突然死以外の病による死などについて考えた時、積極的に死を受け入れ、自分に残された日々について考え、その時なすべきことをしておきたいと思う。死に直面していない今は、よりよい死を望んでいるために充実した日々を送ることが大切だと思っている」

要 約

これまでの分析をふまえて、特に注目すべき問題を考察しまとめたい。

イ. 死の意識・死への誘惑の時期について

「死について意識したり考えたことのある」学生が96%もあり、しかも「最初に死について考えた」のが「小学生の頃」と答えた学生が約45%、「小学生以前」が約8%もいたことは死についての教育や自殺予防を考えるうえで重要な意味をもっているといえることができよう。最近自殺の低年齢化が憂慮されているが(本論執筆中の1996年10月にも小学生三人の自殺を新聞が報道)、

このことは「死にたいと思った」時期についての質問に対して「小学生あるいは小学生以前」の答えが20%もあることを見ても裏付けられているということがいえよう。一般に死を意識し死にたいと思う年齢は中学生か高校生の頃からと思われており、また実際に「中学生の頃」が23.4%、「高校生の頃」が10.4%、合わせて33.8%と最も多いのであるが、われわれはもっと小学生の心、死への関心に着目すべきであろう。小・中学生の自殺やいじめ殺人が頻発している現代、先述の学生の意見にもあったように学校において「道徳の時間」などを利用し、死について授業として発達段階に応じてきちんと教えていくことが必要であろう。

ロ. 死にたいと思った動機について

「死にたいと思った」動機に関する質問では、「ふと何となく」や「むなしさを感じた時」「孤独を感じた時」といった実存的な契機が多く挙げられているのを見ると、人間が「死への存在」であることをあらためて認識させられる。人間はさしたる理由もなく死に惹かれ、何かのきっかけでふっと自殺することがあることを、われわれは深く自覚しなければならない。追いつめられれば死への誘惑はますます強くなるであろう。「いじめられた時死にたいと思った」という答が約17%あったが、最近いじめによる自殺が続発しているゆえんである。また「叱られた時」死にたいと思ったという答が約11%もあったことを見ると、児童生徒の叱り方にも気をつけなければならないことがわかる。

ハ. いじめによる自殺について

学生たちもいじめによる自殺に心を痛め、「自殺はよくない、強く勇気をもって生きてほしい」と書いた学生が沢山いた。そして死について気軽に話し合い相談できる友達あるいは人の必要性を強調する学生もかなりいた。わが国では死に関する話題はタブー視され、死について気楽に話をすることはなかなか難しい。「死について真剣に話し合ったことがある」学生は約46%で、話し合った相手はほとんどが友達（52%）で、高校生の頃（38%）か専門学校生や大学生（37%）になってである。それ故小学生の頃に死にたいと思った子どもは孤独の内に追いつめられて自殺してしまうことになるのではなからうか。したがって気楽に死について話せる雰囲気家庭や学校に作っておく必要がある。そのためにも死に関する教育は重要である。「自殺は人生からの逃避である」「絶対にしてはならない」という信念を持っている学生が73%いることは安心であるが、「時と場合による」といったやや肯定的な答をした学生が25%もいることは気にかかることである。

ニ. 死の学習と教育について

「死について学び考えることは生きていくうえで意義がある」と85%の学生が考えているが、「死について話し合ったことのない」学生が約54%、「学校の授業において死について学んだことのない」学生が37%もいる状況である。そして「学校における死の教育の必要性」を感じている学生は59%あり、大半の学生が「死の教育」に関心をもっていることになる。その時期については「小学生の頃」が約30%、「中学生の頃」が約46%である。小・中学生の自殺が増加し、多

数の自殺予備軍の存在が憂慮される今日、小・中学校の頃から死に関する問題に授業において取り組むべき時が来たいうことができるのではなからうか。そのためには真正面から死の教育に取り組むことができるようまず教員を教育することが必要であり、教員養成課程の教育において死に関する授業を実施することが何よりも重要であろう。専門学校や大学においても「在学中の学校で特別に死の講義を受けたいと思うか」という質問に対し「思う」が51%あり、さらに学年が上がるにつれてその比率は上昇している。特にやがて死に直面したり、ひそかに死の不安におびえる患者や老人に接することになる医療従事者及び介護福祉従事者志望の学生には、死の不安や恐怖に悩まされる患者や老人の心を深く理解し適切な応接ができるように、死に関する問題を学び理解しておくことが重要である。故に専門学校や大学のカリキュラムにおいても「死」に関する講義を組み込むことが必要であろう。

ホ. 死に関する考察と教育の意義

A. デーケン氏も強調しているように、人間の意識の本質的要素である死への意識を無視したり抑圧することは、生そのものを衰弱させ、思考を貧困化し、精神の荒廃をもたらす。死についての自覚と思考は、生命そのものへの思索を覚醒し、創造的思考を刺激し、よりよき生への情熱とエネルギーを産み出すのである。自殺、殺人、凶悪犯罪の激増、アルコールや薬物中毒の蔓延、神経症や精神病の増加、虚無的衝動的な言動、いじめを愉しむ陰湿な嗜虐的あるいは自虐的傾向、無気力・無思考・無節操で受動的な傾向、そして何よりも生命軽視の風潮のび漫と生命力そのものの衰退現象など現代の若者たちの精神の荒廃を表象する現象はいたるところで指摘され憂えられている。このような危機的な現代の精神的状況において死に関する教育は焦眉の急となっているということができよう。

おわりに

この死に関する調査に応じてくれた学生たちは非常に真面目に取り組み、誠実に答えてくれた。「この意識調査によって初めて死について真剣に考えることができた」また「死についてまじめに取り組み考えなければならなかった」と記した学生たちもかなりいて、意識調査そのものによる教育効果について新たに考えさせられた。

最後に調査に御協力頂いた方々に心より謝意を表し筆を置きたい。

参 考 文 献

(註) 田路 慧他著「生命倫理に関する現代学生の意識構造の研究」(『岡山県立大学短期大学部研究紀要』 第2巻 1994)

A. デーケン編『死への準備教育』 全3巻 メヂカルフレンド社

第1巻『死を教える』 A. デーケン著第1章「死への準備教育の意義」参照

ロバート・フルトン編著, 斉藤 武・若林一美訳『デス・エデュケーション』 現代出版

日本死の臨床研究会編 全集『死の臨床』 第3巻『死生観』 人間と歴史社

[本研究は岡山県立大学生命倫理研究会が平成7年度岡山県立大学特別研究助成金の交付を受けて行ったものである。記して謝意を表したい。]

(平成8年10月31日受付)
(平成8年12月25日受理)